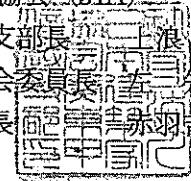


2012年3月8日

松本市長 菅谷 昭様

社団法人 日本建築家協会 (JIA)

関東甲信越支部支部長 浪 寛
同保存問題委員会委員長 三 和子
同長野地域会会長 赤羽 吉人



新村駅舎の保存・活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴市におかれましては当協会からの保存・活用の提言に最大のご配慮を頂けるものと拝察し、ここに以下、要望する次第です。

今般、アルピコ交通上高地線 新村駅舎の建替えを新聞報道で知りました。現在、既存の駅舎に隣接して新駅舎が3月中の完成を目指して工事が進んでいる最中です。

ご存知の通り、当駅舎は大正10年(1921年)、上高地線の前身である筑摩鉄道が開業した当時の姿を今に伝える唯一の現役木造駅舎です。当時の鉄道のシンボルマークや切符売り場や改札口、木製ベンチ、特注の瓦、レリーフ等も当初のまま残り、周辺施設も含め、鉄道駅舎建築の変遷を知る上でたいへん貴重な文化的遺産です。

筑摩鉄道の創業者 上条 信 は、大変苦勞して松本から新村そして島々まで鉄道を引きました。上条 信 は新村出身であり、上高地線はこの新村から始まったとも言えます。そのような新村駅は、地域の人たちにとって子供の頃から見慣れた原風景であり、何代にもわたり生活を共にした、愛着のこもった宝物です。地元の保存活用の気運もすでに高まっています。

また鉄道ファンにとっては周辺の景観や鉄道施設も含めて大変人気の高い駅です。この駅にあえて降り、写真を撮って行く人も多く、今後、観光対象となる大事な資源になることは間違いありません。

現在の位置に残すことにより、建設中の新駅舎と並んで大きさも高さも概ね揃った親子駅舎のようにもなります。位置を変えずに残そうと思えば、あまり多くのお金を掛けずに補強や改修ができるはずですが、また新駅舎の直近ならではの新旧の歴史の見え方を利用する等、活用方法も色々と考えられます。

解体することは簡単ですが、建物がなくなるだけにとどまらず、それにより郷土の文化的な蓄積を失うことは計り知れない損失と言えます。この駅舎の価値を十分に活かすべく、保存修復が可能となるよう、絶大なるご支援・ご英断を心よりお願い申し上げます。

なお、当協会としましても、新村駅舎の保存・活用に関し、できる限りの協力をさせて頂く次第です。

敬具